

# はるいろ恋愛工房

Haru iro Ren'ai Kobo

藤谷 郁

Ito Fuyumi

eternity



エタニティ文庫

週に一度の楽しみは、会社帰りに立ち寄る和風雑貨のお店で、気に入った小物をひとつ選ぶこと。  
それから――

1

待ちに待った金曜日。

午後七時十五分。

更衣室の壁掛け時計を確かめた尾崎梨乃は、会社を出るのがいつもより遅くなつてしまったことに気づいた。  
「あっ、急がなきゃ」

着替えた制服をトートバッグに詰めると、ロッカー扉についた小さな鏡を覗き込む。肩に届く長さのまつすぐな黒髪に、赤みがかったベージュというシックな色合いの口紅。先週買ったばかりの春の新色は落ち着いた大人のイメージで、二十四歳の、それも

どちらかと言えば幼い顔立ちの梨乃には、少し背伸びした買い物だったかもしれない。(だけど、大人っぽいぐらいでいい。あの人は多分、いくつも年上だから)

「あれー、今週もデートなの梨乃ちゃん」

急いで更衣室を出ようとすると、入れ違いで入ってきた経理課の同僚がいたずらっぽく横目で見てきた。

「違いますよー、聖子せいこさん。いつものお買い物です」

「またそんな、気合入ってるじゃない」

聖子は梨乃の着ているベルト付きワンピースをしげしげと眺め回した。ネイビーにドット柄の、クラシカルなデザインだ。

「金曜の夜はいつもお洒落しゃれしていいそと帰るじゃない。バレてるわよ、うふふ」

入社以来お世話になっている二つ年上の先輩は楽しそうに笑うけれど、毎週デートなのは聖子のほうで、梨乃は違う。残念ながら。

「それじゃ、お先に失礼します」

「今度紹介してよ、大人のカ・レ・シ」

背中に飛んできた声にどきっとしたけれど、そのまま振り返らずに更衣室を出た。そして、ドアを閉めたところで深いため息をつく。

「……カレシだったら、いいんだけど」

聖子の言葉は半分当たっていた。絶対、彼氏なんかじゃないけれど。

もう一度ため息をついた梨乃はハッとして腕時計を見ると、慌てて通用口へと向かった。

梨乃が勤める株式会社土川屋つちかわやは、創業二百年の歴史を持つ老舗らひせの和菓子屋だ。和菓子屋と言っても、本州中部に位置するこの地方都市に本店を構え、自社ビルをはじめいくつもの店舗、ファクトリーを展開する大手企業だ。

ここに就職を希望したのは、子供の頃から「和」の文化が大好きだったからだ。本当は、和菓子の企画・製造に興味があったのだが、梨乃は自他ともに認める筋金入りの不器用だった。口の悪い兄などは、「お前が触れば、形あるものは全て崩れ、原型を失くす」などと、はっきり言ってくれる。

そんな梨乃に、食の芸術ともいえる和菓子の製作が務まるはずもない。それでも、「和」の世界への憧れはやまず、この老舗和菓子会社の経理・財務部門で働くことになった。

入社して半年はデパートなどの直営店で、研修として販売の仕事につき、その後、志望したとおり経理課に配属されることになった。

大好きな「和」の世界での仕事は楽しく、日々充実している。ただひとつ不満があるとしたら、短大時代に夢見た「理想の男性との社内恋愛」とは、ほど遠い環境にあるこ

とだろうか。

梨乃の理想はやはり、和風男子<sup>ワフウダンシ</sup>なのだ。が、経理課の同僚は女性がほとんどで、男性といえど課長と係長の既婚組しかない。時々課の有志により営業部や広報部の男性と合同で飲み会をおこなったりするが、理想の人がそうそういるはずもない。

そう、たとえば、地に足が着いていて背筋をまっすぐしている人。顔立ち<sup>おもて</sup>は凛々しく、和服がとつても似合うような。

だけど今時そんなタイプは稀<sup>まれ</sup>なかもしれない。

彼は欲しいけれど、見つからない。

異性に関しては暗澹<sup>あんたん</sup>たる日々を過ごしていた彼女の心に希望の灯<sup>ともしび</sup>が点つたのは、忘れてもない昨年<sup>こぞ</sup>のクリスマス直前の金曜日、夜七時半だった。

駅ビルの九階にオープンしたばかりの和風雑貨店『まほろば』に、その人はいた。

ひと目見た瞬間から、目が釘付けになっていた。

黒髪を清潔に撫でつけ、姿勢がよく品の良いスーツ姿。

和服もしっかりと似合いそうな、適度に厚みのある体格。

優しくも男らしい目鼻立ちに浮かぶ笑みも涼やかで、話し方も丁寧で穏やかであることが遠目からもわかる。

何よりも惹かれたのは、凛然<sup>りんぜん</sup>としながらも静けさをまとう彼の佇まい<sup>たたずまい</sup>だった。

駅ビルの百貨店内という常に人で賑わう場所にながら、何にも影響されないような、独自の世界を持っているかのようなだった。梨乃にはそれが、頼もしく揺るがない、男性の強さに感じられた。

「理想が形になって、目の前に現れた」

知らず唇<sup>くちびる</sup>から零れた感動。

彼女が夢見た、和風男子<sup>ワフウダンシ</sup>の登場だった。

それから梨乃は『まほろば』に足しげく通うようになった。

そのうち彼が毎週金曜日の夜七時半頃に現れ、伝票らしきものにサインをもらった後、十五分ほどでいなくなるのがわかった。

店員と言葉を交わすが特に何かを買う様子もないから、どこかの営業さんかなと当たりをつけた。

そのどこかの営業さん<sup>さん</sup>に週末の和風雑貨店で会うのが、いつしか彼女の、何にも勝る楽しみとなっていた。

(まあ、会うと言っても、あの人は私の存在に気づきもしないだろうし、一方的な……完全な片思いなんだけど)

根本的なところで、梨乃は自信がなかった。

どんなにときめいても、お酒落<sup>し。れ</sup>しても、女らしくしようと頑張っても、いざ彼を目にすると、自分では釣り合わないと思ってしまう。

あんなに素敵な男性の横に並ぼうなんて、もしかしたらものすごく図々しい願望なのかもしれない。こんな童顔ではなく、もっと大人っぽい外見だったなら。中身だって、しっかりととして落ち着いた女性だったなら。

「叶うわけない……かな」

気弱に咳<sup>げ</sup>きながら、それでも彼女は駅に向かった。三月初旬の冷たい風にも負けないように。

この地方で最も大きなターミナルステーションである岬<sup>ササ</sup>駅は、いつも混雑している。週末ともなれば夜遅くまで乗降客の流れが途切れず、いつまでも賑わっている。

梨乃の職場からは徒歩五、六分程度の距離であるが、駅前のスクランブル交差点で信号待ちに引つかかるとそうはいかない。

「まだ大丈夫だよ。七時二十八分十四秒、十五秒……」

コンコースを急ぎ足で歩き、エレベーターに詰まったたくさんの人との隙間に滑り込むと、フロアをカウントする電光表示をじいっと睨んだ。

「早く早く」

各階に律儀に止まりながら、エレベーターはようやく九階、日用品雑貨売り場に到着する。

和風雑貨店『まほろば』は、エレベーターを降り右に折れてまっすぐの、行き止まりの角にある。黒と白を基調とした蔵を思わせるデザインの店舗は、比較的広いスペースを構えている。

梨乃は急ぎ足で乱れた髪を気にしながら、店の端のほうからゆっくりと入った。

商品をチェックしながら、あたりを見回した。七時三十二分。店員はレジに一人、フロアに一人いるが、彼の姿は見当たらない。

「まだ来ていないのかな」

息を整えると、浮つく気持ちを落ち着かせようと深呼吸をする。あまりきよろきよろすると、店員や他の客に不審人物と思われるかねないので、とりあえずは普通のお客さんらしく、季節の新作がずらりと並ぶメインの棚を眺めたりした。

その時、ふと見覚えのある商品に目が留まった。

「あ、これって」

三色の花見団子の絵付けがされた、可愛い小皿のセットである。

「お兄ちゃんの会社のだ」

先日兄が失敗作だからと言つて持ち帰つてきた小皿の、これは成功作品である。彼女の兄は和洋食器を製造する陶磁器の会社に勤めているのだが、時々不良があつて売り物にならなくなった製品を安価で買い取ってくる。

『この団子の一部がさ、微かな傷で線が切れるだろ。たったこれだけでアウトだ。愛嬌のある絵柄なのに、もったいないよな』

梨乃は兄のそんな言葉を思い返しつづ、一枚手にとつて眺めた。

製品検査は厳しく、わずかなミスも許されない。ブランドというものがあるからだ、兄は肩を竦めていた。

「ブランドかあ、なるほど」

値札を見ると、いい値段をしている。立派な化粧箱も付いているし、贈り物用なのねと、そうつと元に戻そうとした時だった。

「良いですよ、その絵柄」

穏やかな男性の声。

お店の人かと一瞬思った。

だが、ここの店員は女性ばかりのはずである。

(だったら、誰……)

「可愛らしい銘々皿。ふふ、でも、載<sup>の</sup>つける和菓子は花見団子じゃないと、様にならな

いかな」

後ろに立つて声をかけてきたその人は、まさしく、その人<sup>だ</sup>だった。

初めて見つけたあの日以来、梨乃の心に灯りを点し続けている、どこかの営業さん<sup>だ</sup>。

「あ、あ……」

驚きのあまり身体が動かなくなるといふ現象を、今、体感している。

そんなふうにはんやりと思うばかりで、反応できない。とにかく、真つ白だった。

一方彼は、意外なほど澄んだ瞳を梨乃に向け嬉しそうにしている。ひよつとして、私<sup>の</sup>ことをずつと前から知っていたのではないかと勘違いしそうなほど、親しみのある笑顔<sup>だ</sup>だった。

「奈良さあーん、お願いしまあーす」

ハツとして、現実に戻った。店員が彼を呼んだのだ。

「はい、ただ今参ります！」

さっきまでとは打って変わった、硬い響きの返事だった。仕事モードに切り替わったような。

梨乃は小皿を手にしたまま、これでもう行ってしまふであろう彼を見上げた。どうしよう、チャンスなのに。

わかつてはいるけれど、あまりにも突然すぎてどうにもならない。

「失礼しました、お客様。では、また」

彼はやはり親しみのこもった笑顔をもう一度梨乃に向けると、会釈えしやくをして呼ばれた奥のほうへと歩いていこうとした。

待って。

待って。

行かないで！

何も考えず、追いかけてよとした。

その時――

留守になった手から滑り落ちた小皿が、派手な音を立てて床の上で真つ二つに割れた。

「きゃあっ」

周りにいる数人の客も、店員も、それから奈良と呼ばれたその人も、陶器の割れた音と彼女の悲鳴に驚いて注目した。

その様子には梨乃は我に返ると、慌てて割れた皿の破片を拾おうとした。

「あつ、駄目です」

突然彼に強い力で手首を掴まれ、梨乃はもう一度声を上げそうになった。

「指を切りますよ。そのままにして」

「ごっ、ごめんなさい」

親身な中にも厳しさの滲にじむ眼差しに動けなくなり、そのまま彼に持ち上げられるようにして立ち上がった。

「お客様、大丈夫ですか」

店員が箒ほうきと塵取りちりとりを持って駆けつけた。

「あの、私……」

梨乃が言いかけると同時に、まだ彼女の手首を掴んでいた彼が口を開いた。

「すみません、上田さん。私が落としてしまいました」

ぽかんとして見上げる梨乃の手首に一瞬ぎゅっと力が込められたかと思うと、すぐに解放された。

「えっ、奈良さんが？」

店員は一瞬困った顔になったが、すぐに気遣うような笑みを浮かべ、梨乃に訊ねた。

「お客様、お怪我はありませんか」

「はい、あの、だ、大丈夫です」

奈良は梨乃を見ず鞆かばんから伝票らしきものを取り出すと、店員が片付けている間に何か書きつけて、ペンを添えて待った。

「上田さん、すぐに代わりの品物を納めますので、よろしくお願いします」

「ああ、わかりました。気をつけてくださいね」

よく見れば上田という店員は、胸に「店長」と印字されたネームプレートをつけている。仕方がないですねと銀縁眼鏡の奥で苦笑した彼女は、渡された伝票にサインをした。「じゃ、納品時の破損ってことで。あと、こっちはさっきの受け取りです」

「すみません」

二人のやり取りを聞いていた梨乃は焦った。

それでは皿の件はこの人の責任になり、伝票を持ち帰れば確実に会社からも咎められる。梨乃が割ったのに。

「あのお」

「それでは早速社に戻って、交換の品をお持ちいたします」

「しっかり頼みますね」

店長はビシリと言うと梨乃にあらためてお辞儀をし、そそくさと店の奥に戻ってしまった。止める間もない素早さだった。

「さ、お客様。参りましょうか」

奈良は丁寧な言葉遣いとともに、店長の後を追おうとした梨乃の肩をやや強引に店の外に向け、そこから連れ出した。

信じられなかった。

あつという間の出来事で何が何だかわからないうちに、彼に押されるようにしてエレ

ベーターに乗り込んでいた。

「いつもは裏から出ていますが、ま、今日はいいでしょう」

口をばくばくさせている梨乃に軽い口調でそんなことを言い、彼は混み合う籠の中、彼女を庇う恰好で前に立っている。

この状況が信じられないまま、梨乃は今になって胸がどきどきしてきた。

彼の顎のあたりに、おでこがくっつきそうになっている。スーツの内側から微かに彼のものらしき香りが感じられ、頭がくらくらして、倒れそうになって……

一階に着くと、多くの乗客に交じって二人も吐き出された。倒れる前に息を吹き返した梨乃だが、奈良は彼女の背に腕を回し、コンコースの改札近くにあるカフェまで誘導した。

この急展開に戸惑いきよろしたものの、梨乃は抵抗できない。身代わりになってくれた彼に対する申し訳なさが、彼女を従順にさせていた。

そしてもうひとつ、ある重大な事を彼に確かめる必要があると気づいたから。

差し出された名刺を見て、梨乃は指先の震えが止まらなかった。

彼は隣のカウンター席でゆったりとコーヒーを味わいながら、そんな彼女をにこやかに見守っている。



「米丸陶器株式会社。岬支店。営業一課の、奈良哲美と申します」

「哲美です。奈良哲美と申します」

哲美と書いて、てつみ。

ずつと知りたかった彼の名前は奈良哲美というのだと、梨乃は感激していた。営業マンだったのは、思ったとおり。だが指先を震わせている一番の原因は、彼の勤め先だった。

「米丸陶器の、営業一課」

「はい、私の所属する部署です」

彼は涼しげな目をして微笑んでいる。どうしてなのかわからないが、何だかとても嬉しそうだ。

だが梨乃はそれはそれとして、今確かめるべきことを口にした。

「私の兄も、米丸陶器の、岬支店の、同じ営業一課に勤めています」

微笑が消え、代わりにきよとんとした表情が現れた。

「お兄さん。お客様の？」

彼はカップを置くと身体ごとこちらを向き、前のめりになった。上体が近づいて、梨乃はますますどきまぎする。

「誰だろう。そうだ、あなたのお名前は？」

「あ、はい。私は、尾崎梨乃と言います」

奈良は目を瞠った。

「えっ、尾崎って、もしかして尾崎友章ですか？ お客様……君は、彼の妹さんってことかい」

梨乃は、息がかかりそうなほど近くに寄った男の瞳を必死で見つめ返し、こくこくと頷いた。

こんなことってあるだろうか。去年のクリスマスシーズンから片思いを続けているこの人が、毎日家で顔を突き合わせている兄の同僚だったなんて。

灯台下暗しという、ポピュラーかつ最高に素晴らしい諺を、心の中で噛みしめた。

奈良は少しばかり興奮していたが、同僚の妹だとわかって心安くなったのか、営業マンらしい態度ではなくなった。親しみを感じさせるにこやかな笑顔に、別の柔らかさが加味された。

「友章とは同い年の同期でもあるんだよ。そうか、君のような妹さんがいるとは知らなかった」

「君のような」とはどういう感じなのか梨乃は訊きたかったが、そんな余裕があるはずもなく、ひたすら空になったカップの底を見つめていた。

兄と同じ年ということは、彼も今年で三十歳。私より六つも年上なんだと、梨乃はこっ

そりと指折つて数えた。

「そうか、面白いなあ。世間は狭いなあ」

「はい、素敵に狭いです」

「ん？」

「いえ、何でも」

頬を赤らめ俯く梨乃を見て奈良はまだ何か話したような顔をしたが、思い直したようにこれからいくつか得意先を回らなければと席を立った。

梨乃はレジに向かう奈良を慌てて追いかける。

「私に出させてください。さっきの、銘々皿のお詫びをさせてください」

兄の話ですっかり忘れていたが、このままでいいはずがない。コーヒー代くらいでは済まないだろうが、奢ってもらうなんてとんでもないことだった。

だが伝票を奈良は握ったまま言う。

「ここは遠慮無用だよ。あれの分はきちんと請求するから」

「え？」

結局払わせてもらえず先に店を出されたが、妙に気になる言い方だと梨乃は思った。

「ありがとうございます。本当に、銘々皿のことも、私が割ってしまったのに」

カフェを出た通路でべこべこと頭を下げる梨乃に、往来の人々が妙な視線を寄越してくる。奈良はもういいからと途中でやめさせると、そばに寄るよう手招きした。

「そんなのは構わない。それよりも、本当は君に話したいことがあって、ここまですご道願つたんだ。お兄さんのことで後回しになってしまったけれど、いいかな、ちょっと」

「な、何でしょうか」

招かれるままパンプスを進めた梨乃に奈良はさらに近づき、なぜかその耳元に低い声で囁いた。

「陶芸教室に入りませんか」

## 2

その夜、夕飯を食べて自室に籠もった梨乃は、奈良の寄越した陶芸教室の案内チラシを何度も読み込んだ。

たまひし  
玉虫陶芸教室

むしがしふつかまらもとしほはら  
虫賀市二日町本下原十五

## 代表講師・玉田園子（陶芸家）

コピー用紙に黒一色で刷られた簡易なチラシであり、代表講師である女性がろくろを使っているらしき写真が載っている。しかし女性の顔は俯き加減であるため、はっきりとわからない。

チラシをテーブルに置くと、奈良の言葉をじっくりと思ひ返す。

『いや、君があまりにも熱心にも銘々皿に見入っていたから、こういった焼物に興味があるのかなと思って。虫賀焼が気に入ったのなら僕も会員になっている教室を紹介するから、一度見学に来てみませんか』

虫賀焼というのは、梨乃の住む町から車で三十分ほどの距離にある虫賀市を中心に盛んに生産されている焼物の名前である。奈良や兄の勤める米丸陶器でも湯呑みから傘立てまで、この虫賀焼をメインに数多くの陶磁器を製造している。あの銘々皿も、その虫賀焼であった。

「陶芸教室かあ」

和が好きな梨乃にとって、日本の伝統的な焼物のお皿や小物は見ているだけでも楽しいし、確かに興味もある。が、自分で作るとなると話は別である。

不器用な梨乃は、学校の工作の時間もさして面白いと感じたことはなかった。中でも

粘度細工は特に苦手で、その惨憺たる創作の歴史は幼稚園時代にまで遡る。

「うーん、どうしよう」

きつと入会しても恥をかくだけに決まっている。己をよく知る梨乃にはそれはもう容易に想像がつくのだ。

「でも、あの人は」

そう、なんと言っても彼は恩人だった。

あの銘々皿には、化粧箱入りセットで八千五百円という値札がついていた。そんな高価な一枚を割って台なしにした梨乃の失敗を、奈良はまるごと被ってくれた。しかもあの店は、大事な得意先であり、心証を悪くしたら困るはずなのに。

考えるほどに、梨乃はむずむずと落ち着かなくなる。

奈良は、あれの分はきちんと請求すると言った。気になる言い方だったがつまり、割れた皿の代金は私にきちんと払ってもらおうということだろう。

だから、それとこれは別々に考えればいいと梨乃は思うのだけれど、やはり落ち着かない。

もう一度チラシを取り、これを渡してくれた奈良自身について考えてみる。

「……そうだよ」

今日あまりにも近づいたことに浮かれすぎて、一番大切な事実を忘れるところだった。

「これって、大チャンスじゃない」

陶芸という要素を抜きにしてみれば、これは彼とお近づきになる大チャンスである。奈良哲美という、これまで見つめるだけで接点ひとつ無かった男性に、一気に近づくとができるのだ。

『陶芸教室に入りませんか』

低音の男らしい声と熱く誘う眼差しが、梨乃の心を捉えている。ただの心ではない。一方的な片思いで温め続けてきた、切ない恋心である。拳を固め、立ち上がった。

女の原動力は、恋。

恥をかいたって構わない。彼のそばに行けるなら。

むずむずは消え去り、代わりにわくわくが湧いてきた。びっくりするような単純さ。だけど、シンプルであるからこそ純粹で迷いもないのだと、梨乃は自分の感情の変化に納得している。

「入ります。私、陶芸教室に」

そう口にした瞬間、梨乃ははつきりと運命を感じた。

彼女がそんな決心をするのを待っていたように玄關のドアが開く音がした。  
(お帰りになられた！)

「お兄さま！」

社員割引で買った薯蕷饅頭じょうまんとんじょうをトートバッグから取り出すと、梨乃はもっと奈良を知るために、兄であり、彼の同僚でもある友章のもとに飛んでいった。

「ああ、哲美が何か言ってたな」

母親のよそつてくれた味噌汁を受け取りながら、友章は気のないふうに答えた。食卓の正面で前のめりになっている妹の、そのあからさまな態度に白けたのかもしれない。

「とつても親切で、優しく、いい人。お兄ちゃんと同僚だなんて、すっごい偶然」

頬を染め、浮き浮きと舞い上がっている。友章は肩を竦めると、妹の大袈裟おおげさな表現で飾られた話を半分聞き流し、夕飯のカツ丼をかき込んだ。

「でも、いいのかしら本当に。お店の商品を壊したのは梨乃なのに、それをその、奈良さんって方が被かぶつてくれたんでしょう。しかも、高価なお皿だっていうのに」

横で聞いていた母親が、その「高価なお皿」と同じ、ただし売り物にならない不良品の銘々皿めいめいざらに薯蕷饅頭を取り分けながら、心配そうな顔をする。

「あ、あれの分は、きちんと請求するって言われているし、もちろん払うつもりでいるよ」煎茶を淹れる手を休めて梨乃が言うと、友章は笑った。

「あいつは請求なんてしないよ。お前に気を遣わせないように言ったただけだ」

「まあ、そうなの」

感心の声を上げる母親に、友章は頷いた。  
 「誰にでも優しいっていうか、ああいうところが女性に受けるんだろうなあ」  
 ちらりと梨乃を見やる。

「女性に、受ける？」

梨乃は湯呑みを兄の前に置くと、自分も椅子に座り薯蕷饅頭をつまんだ。ふたつに割ると、ふわっと山芋の香りがした。この素朴な饅頭は兄の好物である。

「奈良さんって、あの……もてるの？」

彼について知りたいことで、梨乃が最も気になる要素はそこだった。

もっとはつきり言えば、恋人や、配偶者の有無。彼とお近づきになると決めたのはいいけれど、考えてみれば、既に相手がいるならどうしようもないのだ。

友章はとぼけて満腹の腹をさすっている。

「お兄ちゃん」

饅頭を割ったままの恰好で責める妹に、友章はにやにやしながら言う。

「もてるもてる。営業一課では俺の次くらいに人気者だぜ」

「それじゃ、大したことないわね」

母親の茶々に、リビングでテレビニュースを見ていた父親も振り向いて笑った。梨乃

だけが深刻に眉を寄せている。

「そ、そうなの」

友章は冗談めかしたが、実際美形の上に如才ない彼は人気者だ。

梨乃は奈良の姿を思い浮かべる。

彼は素敵だし、誰にでも優しいならそれはもてるだろうなど、今になって複雑な思いがした。

友章は饅頭をぱくつと口に放り込むと、いかにも可笑しそうに身体を揺らした。

「おいおい、あんまり妹をいじめるな」

食卓に移動してきた父親が、いつもの息子のおふざけを見抜いて注意した。

「え？ もう、どういうこと？」

表情を曇らせる梨乃に、友章は煎茶を飲み干してから、真面目になって教えた。

「哲美はな、茶碗や皿にしか興味のない陶芸バカだよ。彼女なんていない。もてることはもてるけど、あれは女いらずの変わり者。一生独身だね」

三月は決算月でもあり、特に月曜日は各部署から伝票データが大量に回ってくるため、経理課は非常に忙しい。業務を終えてタイムカードを押し込んだ頃には、午後九時を過ぎていた。

急いで更衣室に駆け込み慌しく着替えると、梨乃は携帯電話を構えて電話帳のキーを押した。玉虫陶芸教室の電話番号はすでに登録してある。

「早く電話して、見学の予約をしなくちゃ」

今日は電話をしようにも時間がなく、昼休憩も食事をするのが精一杯だった。陶芸教室の案内には午後九時半まで開いているとあったから、今ならまだ間に合う。更衣室も幸い一人きりで誰もいない。

「よし」

発信のボタンを押した。

電話に出るのは、陶芸教室の先生だろうか。少なくとも奈良ではない。にもかかわらず、梨乃は全身まるごとどきどきして、ひっくり返りそうになっている。

数秒後、応答の声があった。悲鳴を上げそうなくらい驚いたがかるうじて堪える。

「お待ちせいたしました。玉虫陶芸教室講師の玉田です」

(タマダ、たまだ、玉田さん……)

ということは、代表講師の女性だ。

梨乃は頭の中に案内チラシの写真を思い浮かべる。顔はよくわからなかったが代表講師というからには、てっきりかなりのベテランの年配の女性だとばかり思い込んでいたので、聞こえてきた若い声が意外に感じられた。

「もしもし」

「あつ、すみません。あの、私、尾崎という者ですが、そちらの教室の案内チラシを見て電話したのですが」

恥ずかしいくらい上ずっている梨乃に、相手は「あらっ」と明るい反応をした。

「もしかして、哲美君の紹介で入会される、尾崎梨乃さんですか？」

「えっ、あ、はい」

はきはきとした口調に釣られ、「入会」と言われたにもかかわらず、つい肯定してしまう。話が既に通っていることにもびっくりしたが、親しげな『哲美君』という呼び方にも別の意味でどきつとした。

「まあ、やっぱり。うふふ、哲美君からよろしくと頼まれておりますので、すぐにわかりました。早速のお電話をありがとうございます。では、入会申し込みの用紙を送らせていただきますので、ご住所を……」

「は、いえその、その前に私、一度見学をしたいのですが！」

どんどん進む流れを止めるため、大きな声になってしまった。

「ご見学を？」

だが相手は落ち着いたもので、梨乃は何だか自分が子供のように思えてきた。携帯を握る手に汗が滲んでいる。

「はい、見学をしたいのですが」  
 奈良は確か、『一度見学に来てみませんか』と言ったはずだ。即入会となっているこの流れに、入る気満々の梨乃も躊躇してしまおう。

「哲美君ったら、もう」  
 相手が小さな息を漏らした。不満そうではあるけれどやはり親しげな、そう、身内のような親密さを匂わせるため息だった。

「申し訳ありません。どうやらこちらの思い込みで、即入会の手続きをするところでした。そうですよ、一度ご見学されたほうが……あ、失礼ですが陶芸のご経験は？」

ウツと言葉に詰まる。ご経験どころか、この救いようのない不器用ぶりをどう伝えればよいのやら。

「いいえ。全く、ないです」

端的に答えた。他に適切な表現を探せなかった。

「わかりました。では、そうですね、平日は月、木の午後七時半から九時半まで、日曜日は午前十時から正午まで教室を開いておりますので、尾崎さんのご都合の良い日のご予約を承りますが」

「はい、ではええと、次の日曜日にお願います」

「次の日曜日、というと、三月十八日になりますね」

玉田代表講師は「当日に必要なものは汚れてもいい服装だけです」と笑ってから、日にちと時間を再度確認する。

「詳しい講座内容や料金などが書かれたパンフレットがありますので、送付しますね。」

申し込み用紙もやはり同封しておきます。記入してお持ちくだされば手続きもその場で行えますので」

「はい、ありがとうございます」

梨乃はそれならと、住所を告げた。

「では、お会いできるのを楽しみにしております」

嬉しそうに言い、梨乃が電話を切るのを待っていてくれた。

（親切な人だな）

無事見学の段取りができて安堵した梨乃だが、ただひとつ、『哲美君』という親密な響きだけが耳に残り、一人きりの更衣室でしばし佇んでいた。

玉虫陶芸教室に電話した二日後の水曜日。

梨乃が仕事から帰ると、母親がばたばたと廊下を小走りして出迎えた。手に茶封筒を持ってきている。

「ねえ、玉虫陶芸教室ってところから手紙が来てるんだけど」

「えっ、もう？」

訝しげな様子の母親から角四の封筒を受け取ると、宛名の下に教室の名前が印刷されている。

「仕事の速い人だなあ」

てきぱきとした玉田代表講師の口調を思い出し、思わず感嘆の声を上げる。

「宛名は確かに尾崎梨乃様になってるけど、何なのこれ」

この家にはついぞご縁のない世界から舞い込んだ手紙に、母親は首を傾げている。

「ちょっと、習うことになって」

「陶芸を、あんたが？」

母親は娘の不器用さを知っている。図工や美術の成績がどんなものだったのかも。

「あ、もしかしてこの間の、友章の同僚って人の影響？」

ぼんと手を打つ母親に「そうじゃないけど、ただ、やってみたくなくて」などと曖昧な返事をして、二階の自室に駆け上がった。不純な動機を指摘されたようであったまればなかつた。

梨乃は早速、書類作りに取り掛かった。

だが、必要事項を記入しながらも、いよいよという段になって迷いが生まれた。

それは、さつき初めて感じた違和感だった。

こんな動機で入会してもいいのだろうか。大チャンスだと気負いこんだが、客観的に見ればかなり不純な動機である。

「うーん」

迷いを映して歪む文字に、ますます迷う。

ぱたつとペンを置くと、チェストの上からこちらを見下ろす、虫賀焼の銘々皿に目をやった。兄が引き取ってきた不良品だけれど、奈良とのご縁を結んだ日の記念として、プレートスタンドを用意して飾ったのだ。

「奈良哲美……さん」

あの日、声をかけてくれた。

割れた小皿を拾おうとした私の手首を掴み、指を切るからと止めてくれた。

割ったのは自分だと言ひ、庇ってくれた。

混み合うエレベーターでも、前に立って守ってくれた。

コーヒーをご馳走してくれて、気を遣わせないようにもしてくれた。

陶芸教室に勧誘するためだけに、そんな親切をするはずがない。あの人は、兄の言うように『陶芸バカ』の『変わり者』かもしれないけれど、同時に周りに対して親切で、とってもいい人なのだ。



週末の出来事が、頭の中をひと息に通り過ぎた。迷いは消え、梨乃は書類に署名捺印した。

陶芸教室の見学を明後日に控えた金曜日。

月曜日と同じく残業で遅くなり、帰り仕度が整った頃にはやはり午後九時を回っていた。

「今週は遅くなっちゃったね。これからデートなのお？」

更衣室に聖子が入ってきてきて、にやにや顔で冷やかした。どうしてもデートに結びつたがる彼女に梨乃は嘆息して、

「もう、だから違いますって」

と、少しむくれて見せた。

「あはは、そう？　そういえば、今日は随分カジュアルだね。いつもは大人っぽいワンピースとか、細身スカートとか、落ち着いたコーデイネットなのに」

よく見ているなあと苦笑しながら、『まほろば』で奈良との仮想デートを楽しんでいた自分の一生懸命さを振り返った。本当に、想像だけでも、あんなに充実していたのだ。「チェックのシャツにスキニージーンズか。うん、軽やかで、二十四歳らしい組み合わせだね」

聖子は着替えながら、後輩のファッションを微笑<sup>ほえ</sup>ましそうに眺めた。

「でも、彼氏はオトナなんでしょ？」

「いませんよ、彼氏なんて」

好きな人は、確かにオトナだけれど。

心の中で付け足した。

「ふーん、マジで？」

「う、うん」

不意に真顔になった聖子にどきっとした。いつも冗談交じりだからかかってばかりの彼女が、ハセンチヒールで間を詰めてきた。

「じゃあさ、営業の皆さんから花見のお誘いが来てるんだけど、どう？」

聖子の恋人は営業部に所属しており、時々飲み会のセッティングを頼まれているらしい。それは梨乃も知っている。

「どうって……」

「フリーなら紹介したい男のコがいるんだけど。結構イケメンで、かっこいいよお」

聖子は周りで着替えている女子に聞こえないよう、声を落とした。

「や、それはちょっと」

「あ、やっぱりいるんだ、彼氏」

「いいえ、そのっ」

これで許してくれるかどうかかわからないが、梨乃は現状ありのままを伝えた。

「好きな人がいるんです。片思い、ですけど」

「あ、そう」

聖子は意外にあっさりと解放してくれた。しかし「状況が変わったら、教えてね」などと言い、「男は一人じゃないよ」とも言い添えた。

失恋を前提にされたようで嫌な気持ちになったが、これは年上女性からの真つ当なアドバイスで、彼女は梨乃が背伸びをしていることを見抜いた上で心配してくれているのかもしれない。

梨乃は良いほうに考え、とりあえずその話は終わりとなった。

『まほろば』のあるターミナル駅のビルを見上げ、梨乃はふと寂しさを感じた。

今夜は初めから残業で遅くなるとわかっていたので、珍しくお洒落しやれをしてこなかった。お店の商品を壊してしまっし、いずれにせよ行きづらい。

「今日はこのまま、帰らなきゃ」

和風小物の買い物と、どこかの営業さんさんに会う週末のふたつの楽しみが、身体の内まで習慣になっていたのだと痛感した。

『まほろば』はその名のとおり梨乃にとって素晴らしく、心から安らげる大切な場所。今でもまるで心の故郷のようだと思っている。

「でも、これからは」

彼女の双眸そらまへは、街の灯りを反射しきらきらと輝く。

お気に入りのお店には行けず、片思いは続いている。

だけど、新たな道が目の前に開ひらけている。

「うん、頑張る」

心は早くも日曜日へと、希望の一步を踏み出していた。

### 3

フロントガラス越しに晴れた空を見上げ、梨乃は深呼吸をした。

ここは玉虫陶芸教室の駐車場。休日のためか高速道路も一般道も空いており、予想より早く到着してしまった。教室が始まる午前十時まで、まだ二十分も余裕がある。

だが、車の中でぼんやりしていても恰好がつかないので、梨乃はとりあえず車から降りた。草と砂利の地面にロープを張っただけの簡素な駐車場から、あたりを見回す。

小山に囲まれたのどかな風景。周りには畑や雑木林が広がり、その間を草花がのびのびと生えたあぜ道が縫い、それに沿うように大小の民家が軒々と散らばっている。

「山の匂いが気持ちいい」

もう一度深呼吸をして、爽やかな空気の中を歩いていった。少し肌寒く、バッグに入れておいた春物のカーディガンを羽織る。ついでにバッグの中身を確認した。

「汚れてもいい服とタオルと、入会申し込み用紙。うん、ちゃんと持ってきた」

もうひとつ提げている紙袋には、手土産として持参した土川屋の和菓子が入っている。来る前に本店に寄り、昨日予約しておいた分を買ってきたのだ。

「準備は万端。さて、と」

今運転してきた駐車場横の道路を横切ると、教室がある。

周りの民家とは少し趣の異なる白っぽい建物で、陶芸教室の会場だった。切妻屋根は深緑色、二階建ての二階部分に『玉虫陶芸教室』の文字が書かれた看板が掲げられていて、その下に入口がある。ガラスの扉は自動ドアだが、梨乃が近づいても反応しない。まだ誰もいないようである。

「やっぱり、少し早すぎたよね」

張り切って早起きして出てきたのはいいが、こうなると余計に緊張してくる。

「落ち着かなくちゃ」

もう一度駐車場の方向へ歩き、山並みに目をやった。

「虫賀市かあ」

焼物の生産が盛んなことで知られるこの町は、静かで穏やかで、まるであの人のように、梨乃は緑の山と青い空に奈良の笑顔の思い浮かべた。その時だった。

「おはようございます！」

「ひゃあっ」

いつの間にか奈良が後ろに来ていた。声をかけられるまで音も気配もしなかった。

「今、鍵を開けるからね。こちらへどうぞ、梨乃さん」

にっこりと、たった今まで思い浮かべていた笑顔が彼女を呼んだ。それも、下の名前で。「い、いつの間……じゃなくって、あの、おはようございます。よろしく願います」

「こちらこそ」

奈良は作業スボンに長袖の綿シャツという恰好で、いつものスーツではない。その姿が梨乃にはとつともなく新鮮で、男らしく映る。

それにしても、いつどこから現れたのかさっぱりわからない。確かに今の今まで、誰もいなかっただけなのに。

奈良は手に持っていた鍵で自動ドアのロックを外し、手で扉を開く。先に入った彼はあちこちの電灯を点けてまわり、奥の部屋に入ったかと思うと、すぐに手に何かを持つ

て出てきた。

「まだ十五分あるな。まあいいや、始めちゃおう」

「えっ」

目をばちくりさせて隅に立っている梨乃を横目に、奈良は中にあつた作業台の上にその「何か」をどんと置く。

「汚れてもいい服、持ってきたね？ 着替えて、ここに来て」

その塊を見て、梨乃はハツとした。ビニールに包まれたそれは、粘土のようだった。どうやら、玉田代表講師ではなく彼が今から教えてくれるようだ。

梨乃は汗が噴き出しそうに勝手に熱くなる身体を震わせ、とにかく言われたとおりにするべくカーディガンを脱いでバッグに入れ、代わりに古いトレーナーを取り出した。

「そうそう、動きやすい古着は取っておいたほうがいいよ。これからいろんな役に立つ」

（これからって、これからって、やっぱり入会決定ですか）

頭の中がぐるぐるになりそうな奈良の言葉。

ブラウスの上にトレーナーを着ながら、震えを抑えられないまま焦りまくった。

準備を整え奈良のそばに寄ると、彼は「よし、やるか！」と気合いを入れた。梨乃はびくっとしながらも、彼のまた違った男らしさを発見していた。

（ああ、素敵すぎる）

「土はね、扱いやすいようにブレンドされたものを使う。だが土の固さは均一じゃないから、練る必要があるんだ。今日は手びねりで湯呑みと丸皿を作ってもらうから、荒練（あらね）だけでいいからね」

「は、はい？」

半分わかったような、わからないような梨乃の返事に、奈良は励ますようににっこりと笑う。

（なんて優しい笑顔なの）

混乱しつつも梨乃は嬉しくて涙が出そうだった。

奈良は粘土の塊を太い針金で切り分けると、自分の前に置いた。大きなサイコロといった感じである。

「コツを覚えるまでは結構体力を使うし、筋肉痛になったりする」

そう言いながら、ぐいぐいと練り始めた。押し込んだり、たたんだり、練り返し。かなり力が要りそうなのに、奈良の横顔は涼しげである。

「まあ、こういったことは実践あるのみだね。やってみて」

「えっ！」

「えっ、じゃなくて」

驚く彼女に呆れた目を向け、奈良は練りかけの粘土を指さした。

「でも」

頭の中に幼稚園時代の粘土遊びの思い出が蘇る。ひとつも思うようにならない頑固な塊に、苦しめられたあの幼い日々。

しかし今は感傷的になっっている場合ではなかった。奈良の顔から笑みが消え、いつの間にか真顔になっている。

「はい、やってみます」

恐る恐る両手をかけた。ひんやりとした手触りに、鳥肌が立ちそうになる。

「まず押し込んで、体重をかけて。さっき僕がやったみたいに、こうして」

「は、はあ」

言われたとおり、見たとおり、とにかくやるしかなかった。横に伸びたら今度は縦に押し込んで伸ばしてを繰り返す。初めての梨乃には、かなりの重労働。緊張もしているので、熱いやらひやひやするやらでいろんな汗をかいてしまう。

おまけにすぐそばに奈良の顔と身体があり時々手を添えたりするので、あらぬ想像をしてしまうという、変なところで余裕がある梨乃だった。

「うん、頑張ったね。いい感じだよ」

仕上げは奈良がやってくれた。

砲弾ほうだんの形にまとめて、台の上に立てる。これで出来上がりだと言う。

頑張りを褒められたのは嬉しいけれど、たったこれだけの作業で全体力を使い果たしてしまいクタクタだ。「こんなの私だけ？」と誰かに聞きたかったが、午前十時になったのに教室にはまだ誰も来ない。随分のんびりとしたものである。

「今度は道具を教えよう」

奈良は疲れている梨乃に気づかないのか、さっさと次の用意をする。

梨乃はバッグからタオルを出して汗を拭くと、作業台に戻った。奈良はそれを見て、なぜか嬉しそうに目を細めた。

彼は練った粘土に濡れ雑巾をかけ、梨乃を椅子に座らせた。

「まず初めに湯呑みを作ってもらってから、使うのは、手ろくろ、コテ、剣先けんせん、なめし皮に……本当は、練りの作業を始める前にこれらは用意しておくべき。今日はちょっと、僕も張り切りすぎてうっかりしてたけど……あ、いやつまり」

奈良はコホンと咳ばらいをする。

「土が乾いちやうからね」

「あ、なるほど」

少し気になる咳ばらいだったが、どうやって使うのか謎の道具達を前に、梨乃は行儀よく指示を待った。と、その時。

「ああー、ごめんなさいね、尾崎さん。遅くなってしまつて」  
慌しく入ってきた女性に、ハツとして振り返る。聞き覚えのあるはきはきとした口

調から、代表講師の玉田園子であるのに気づいて、椅子から立ち上がった。

「五分の遅刻だよ」

奈良が壁時計を見て言うと、「ごめんごめん」と謝りながら梨乃の前まで近づいてくる。梨乃より少し年上だろうか、目鼻の作りがはっきりとした美人だった。声や話し方から、なんとなくきれいな女性を想像していた梨乃は納得してしまふ。

「初めまして。玉虫陶芸教室代表講師の、玉田園子です」

「こちらこそ初めまして。私は尾崎梨乃といえます。えと、今日はよろしくお願いします」  
深く頭を下げた彼女に、梨乃も恐縮してややぎこちない挨拶を返す。

「はい、どうぞよろしくお願いします……って、もう始めてたの？」

園子は軽くウエーブのかかった薄茶色の髪を後ろで束ねながら、呆れたように奈良に言った。

「うん。二時間なんてすぐに過ぎちゃうからね、早めに取り掛かったほうがいいだろ。

それに、彼女は張り切つて二十分も前に到着している。意気込みに応えなきゃ」

梨乃は「えっ」と彼を見た。自分がここに着いた時刻を知っているとは。

そう言えば、奈良がいつの間にか後ろに立っていたのも不思議だった。教室は鍵がか

かっていたから中で待つていたということもないし、どこから現れたのか皆目わからな  
い。

梨乃の疑問を察したのか、園子が面白そうに教えてくれた。

「この人ね、ここの裏に住んでるから、きつと尾崎さんの車が停まる音を聞きつけて、  
庭づたいに出てきたのよ。突然現れたでしょ」

梨乃は目をぱちくりとさせた。

「裏に、ですか」

「いや、たまたま外にいたから。それに、どうせ僕が鍵を開ける係になつてるからね。まあ、  
どっちでもいいでしょう、そんなことは」

奈良は頭をかきながら、言い訳するように説明する。

そうして作業台のほうへ向くと、梨乃にも座るように言った。

梨乃は、彼が裏に住んでいるというのが気になったが、奈良はもうその話題は終わり  
とでも言いたげだ。

作業を始めようとする彼に、園子は腰に手を当てるのと不満そうに言った。

「それにしても、きちんと教室の説明をしてから体験に入ってもらふべきなのに、いき  
なり荒練りをさせるなんて。いくら哲美君の紹介だからって、ここの責任者は私なんで  
すからね」

「わかってますよ」

奈良はそう返事しながらも彼女を見ない。梨乃はその不穏な雰囲気にもぞもぞとした。「ごめんね、尾崎さん。何かあったらすぐに私に言って。陶芸のことになると、ほんと頑固なんだから」

「は、はあ」

園子は最後のほうで声を潜めたが、彼には聞こえただろう。知らん顔をしているのは、いつものことだから？ などと思いつつ、間に挟まれた梨乃は曖昧に頷くしかなかった。「さ、梨乃さん。まずはこうしてね、『ひも』を作ってみよう。底になる土台を作って、その上にこの粘土で作った輪っか、これを『ひも』と言っただけど、これをいくつも重ねていって湯呑みの形にするんだよ」

園子は指導を始めた奈良に肩を竦めると、奥のほうに行ってしまった。そのうち一人二人と会員が入ってきて、教室はわいわいと賑わい始める。

そんな中、梨乃も初めての『ひも』作りの練習に取りかかった。

練習が済むと本番である。

奈良は手本として湯呑みの底になる部分を器用な手つきでこしらえると、「君もやってみて」と粘土を適量とって梨乃に渡した。

「ええと」

彼が簡単そうにやったのを真似て厚みの均一な円盤を作ろうと試みるが、やはり彼女には困難な作業だった。

（あああ、できないよう）

そばで奈良が見ているから余計に焦りまくり、粘土も梨乃も、ますます不恰好になっていく。

「大丈夫、土はきちんと応えてくれる生き物だから」

「いきもの？」

奈良はでこぼここと固さの偏った梨乃の粘土を取り上げると大事そうに手で包み、頬をすり寄せた。ハムスターか小鳥でも愛でるような、なんとも優しい仕草である。

「あの……」

ぼかんとする梨乃に構わず、彼はごく普通の調子でそれに話しかけたのだ。

「さあ、彼女の言うことを聞いてあげてくださいよ。何しろ初めての体験なんですから、手加減してやってください」

一体何が起こったのか把握できなかった。手の中の粘土を叩きつつ、締めつつしながら、ずっと話しかけている彼を、梨乃はただ見つめることしかできない。

「お願いしますね。そうそう、頑固にならず、柔らかく素直に。そうですか、わかって

いただけましたか。はい、梨乃さん」

「えっ？」

ポンと塊かたまりを手渡されて、びっくりする。だがそれは、さつきよりもずっと扱いやすそうな感触になっていた。

「彼カがご機嫌なうちに、早く」

「は、はいっ」

気がつくのと、周りで作業している生徒達がこちらを見て、クスクスと楽しそうに笑っている。しかし奈良は大真面目だ。梨乃もそれに応えねばととにかく懸命に円盤を作っていた。

粘土がご機嫌になった――

そう思えるほど、手の中の塊は素直に言うことを聞いてくれた。

奈良は今、パフォーマンズをしたわけではなく、多分、本気で土に話しかけていたのだ。あまりにも真面目でちよっぴり気恥ずかしく思ったけれど、その後は不思議なくらいスムーズに作業は進んだ。

「次はひもです。さあ、梨乃さんも彼カにお願いしましょう」

「うっ、はい」

奈良は本気である。

戸惑う梨乃だったが、こんな自分が強情な彼カを思うように扱おうとするならば、お願いするしかないのかもしれない。

そう考え、土の塊かたまりを手の平で揉み、空気を抜きながら声に出して言った。

「あのう、粘土さん。恐縮ですが、私は不器用者なので、その……いい感じに、ええと、ひもになっていただけると、ありがたいのですが……」

肩を震わせる人、堪こらえきれずに噴き出す人、周りの反応に梨乃は顔から火が出る思いだったが、奈良は、「その調子、その調子」と真剣な態度で褒めてくれる。

なんだか変。すごく変。だけど、なんだか楽しい。こんな感覚、初めて――

終始おしま和やかな雰囲気の中、見学けんがくというよりも体験たいけんさせられてしまった二時間は、あつという間に過ぎていった。

「今日はありがとうございました」

どうにかこうにか筒型の湯呑みは形を成し、残りの粘土で作った丸皿も、いびつにはなってしまうが素焼き手前まで作業を終えることができた。奈良の指導は不思議で、ちよっぴり恥ずかしかつたけれど、楽しかった。

しかし梨乃は自分の製作過程を思い出し、小さくなっていった。あまりにも不器用なため、かなり手こずったのである。



特に、湯呑みの成形はハイレベルな作業だった。コテで内側を滑らかに整えるなど梨乃にとっては神業であり、「絶対無理！」と叫びたくなったほど。手の平に収まるほど小さくて単純な形なのに、情けなくなってしまうた。

だがそんな彼女にも、奈良は粘り強く手本を示しながら教えてくれた。代わりにすっかりやってくれることはなく、「下手でもいいから、自分で」と基本的に見守る姿勢を崩さなかった。先生としては厳しいなど梨乃は意外に感じたが、とにかく頑張った。

「すみません、私、本当にこんなことで」

小さく肩をすぼめる梨乃に、奈良はいつもの涼やかな笑みを向けてくる。

「大丈夫だよ。初めてなんだし、これで上等。焦らなくてもいい」

気さくな物言いでの励ましは、まさに乾いた土に沁みいる慈雨のごとく、梨乃の心を潤した。周りにいつの間にか集まっていた教室の生徒達も、そうだそうだと頷いている。

今日は中高年の男女を中心に、十名の生徒が各々の作品に取り掛かっていた。皆、教室に入ってから五年以上のベテランばかりで、中にはかなりの腕前の人もいるが、最初は全くの初心者だったと励ましてくれた。皆、初めはそうだったのだ。

「皆さん、どうぞお座りになってください」

窓際に据えられた大きなテーブルに、園子がお茶を運んできた。見ると、テーブルに

はすでに梨乃が手土産に持参した和菓子<sup>わがし</sup>が並べられている。

「本日、体験に来られた尾崎梨乃さんからお土産をいただきました。尾崎さんは和菓子の会社にお勤めで、こちらは春の新作だそうです」

席に着いた生徒達は、ほおっと春をイメージしたその菓子を珍しそうに眺めた。桜の花をかたどった薄紫の羊羹<sup>ようかん</sup>を、透明の寒天が包んでいる。

「あらっ土川屋さんって、有名なお店じゃない」

生徒の一人が包み紙に印刷された会社名を見て、嬉しそうに言った。

「そうそう、岬駅の近くに本店がある、老舗の和菓子屋さんだよね」

梨乃は笑顔で頷いた。色合いもきれいな新作菓子を、皆気に入ってくれたようではほとする。

だがふと見ると、奈良だけは手を付けず、じーっと手元に置いたまま凝視している。甘いものは苦手だったのかなと梨乃は心配したが、やがて顔を上げた彼はまさしく春爛漫<sup>らんまん</sup>とでも言いたくなるような明るい笑みを広げていた。

「きれいだね、これは素晴らしい。なんとという名のお菓子なんですか」

あまりにも屈託のない表情に、梨乃は思わずときめいてしまう。

しかし皆が注目しているので何とか気持ちを静め、きちんと彼に向き合って答えた。

「『初花』<sup>はつはな</sup>といいです。春の陽光に、その年初めて綻んだ桜の花を表しています」

「はつはな」

奈良の頬が、心なしか染まっている。純朴で素直な反応に、梨乃のときめきはさらに高まっていく。

「初めての花か」

もう一度眺めてから、楊枝ようじを使い口に運んだ。無駄のない、滑らかな所作だった。

梨乃の頭の中に、彼の和服姿が鮮やかに浮かんできた。穏やかで大人で、和の風情がびたりと似合う、理想どおりの男性だった。

教室の皆にも、季節の和菓子は好評だった。

「きれいだねえ、日本人の心だねえ」

「四季それぞれの美しさを表現するのは、我々の作陶さくとうにも言えますが、日本人ならではの感性ですよね」

ほのぼのとしたお茶の時間が過ぎていく。

この場所は、おそらく自分にとって大切な空間になるだろう。

強くそう予感しながら、今まで以上に好きになった目の前の人のいる、この幸せな世界に飛び込むべく梨乃は口を開いていた。

「私、今日から入会します。どうぞよろしくお願いします」

お茶の時間の後、署名捺印を済ませてある入会申込書に、入金金と月四回コースの受

## 立ち読みサンプルはここまで

講料を添えて、園子に提出した。これで、梨乃は玉虫陶芸教室の正式な会員だ。

「この他に粘土代や焼成費しょうせいを、その都度いただきますので。こちらは料金表になりますね」

「はい、わかりました」

「それと以前お伝えしたとおり、平日は月、木の午後七時半から九時半まで、日曜日は午前十時から正午まで教室を開いています。尾崎さんは日曜日のこの時間をメインにしますか？」

「はい、そうします。平日は難しいので」

奈良がそばで聞いている。紹介した責任があるからだということとはわかっているが、それでも、そこにいてくれることが嬉しかった。

「もし休まれる場合は他の曜日に振り替えもできますから、電話でお知らせください。

他に何かわからないことはありませんか？」

今回の体験で教室の概要は把握できた。わからないことは、言ってみれば陶芸に関する全てであるが、今訊くことではないのでとりあえず首を振った。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」

「そうですか。いつでも何でも訊いてくださいね。私はもちろん、他の講師でも全然構いませんから」